

大 恩 寺 遺 跡

県道赤根富来浦線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県文化財調査報告書第97集

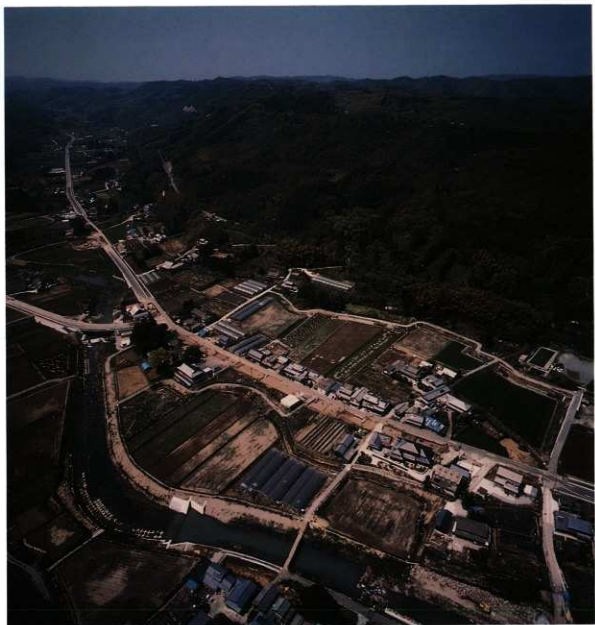
1997

大分県教育委員会

大 恩 寺 遺 跡

県道赤根富来浦線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県文化財調査報告書第97集



大恩寺遺跡遠景

序 文

国東半島の東部に位置する国東町は、縄文時代から近世にかけての遺跡が数多く存在しています。特に田深川下流域には、「西の登呂」として知られる『史跡安国寺集落遺跡』が存在し、今年度から遺跡の整備事業が始められました。また、古代から中世にかけては六郷満山仏教文化の中心地として栄え、岩戸寺や成仏寺の修正鬼会などの伝統文化は今も受け継がれています。

今回の大恩寺遺跡は、県道赤根富来浦線道路改良工事（大恩寺工区）に伴う事前の発掘調査で、平成6年と平成8年の2回に分けて実施したものであります。国東半島東部では発見例の少ない、弥生時代中期の土器が良好な状態で出土するなど、当時の人々の生活を知る上で、注目される成果をあげています。本書が文化財の保護・啓発ならびに学術研究に役立てば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御協力をいただいた関係各位に対して、衷心より感謝を申し上げます。

平成9年3月

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治

例 言

1. 本書は平成6年度から平成8年度にかけて発掘調査を実施した県道赤根富来浦線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。
2. 発掘調査は、大分県土木建築部の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
3. 調査団の構成は次の通りである。

平成6年度

- 調査委員 末広 利人 (大分県教育庁文化課長)
調査主任 渋谷 忠章 (同文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長)
調査員 玉永 光洋 (同文化課主査)
調査事務 小野 倉吉 (同文化課課長補佐兼管理係長)
原 浩一 (同文化課主事)

平成7年度

- 調査委員 末広 利人 (大分県教育庁文化課長)
調査主任 渋谷 忠章 (同文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長)
調査員 五十川孝正 (同文化課主任)
染矢 和徳 (同文化課主事)
調査事務 油布 芳典 (同文化課課長補佐兼管理係長)
小野 高寛 (同文化課主事)

平成8年度

- 調査委員 後藤 一郎 (大分県教育庁文化課長)
調査主任 渋谷 忠章 (同文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長)
調査員 染矢 和徳 (同文化課主事)
調査事務 山崎 靖信 (同文化課課長補佐兼管理係長)
小野 高寛 (同文化課主事)

4. 遺構の実測・写真撮影は調査員、調査補助員があたり、遺物の実測・製図は調査員の他に西村しのぶ・阿部みゆき・横山明代の協力を得た。さらに遺物写真については藤田大祐(フジタフォトサービス)の協力を得た。
5. 本書の編集、執筆は染矢が行なった。

本文目次

I. 調査に至る経過	1
II. 地理的歴史的環境	1
III. 調査の概要	1
IV. 遺構と遺物	6
V. ま と め	18

插图目次

第1图	大恩寺遺跡周辺遺跡分布図……………	2	第19图	11号土坑実測図……………	13
第2图	大恩寺遺跡周辺地形図……………	3	第20图	12号土坑実測図……………	13
第3图	大恩寺遺跡遺構配置図……………	4	第21图	13号土坑実測図……………	13
第4图	1号竪穴住居跡実測図……………	6	第22图	14号土坑実測図……………	13
第5图	1号竪穴住居跡出土遺物実測図……………	6	第23图	1号溝状遺構実測図……………	14
第6图	2号竪穴住居跡実測図……………	7	第24图	2号溝状遺構実測図……………	14
第7图	1号土坑実測図……………	7	第25图	2号溝状遺構出土遺物実測図……………	14
第8图	2・3号土坑実測図……………	7	第26图	3号溝状遺構実測図……………	15
第9图	4号土坑実測図……………	8	第27图	4号溝状遺構実測図……………	15
第10图	5号土坑実測図……………	8	第28图	1号中世墓実測図……………	16
第11图	6号土坑実測図……………	8	第29图	1号中世墓出土遺物実測図……………	16
第12图	7号土坑実測図……………	8	第30图	1号竪立住建物実測図……………	16
第13图	7号土坑出土遺物実測図……………	9	第31图	1号竪立住建物出土遺物実測図……………	16
第14图	8号土坑実測図……………	9	第32图	階段状遺構実測図……………	16
第15图	8号土坑出土遺物実測図(1)……………	10	第33图	大型落ち込み出土遺物実測図……………	17
第16图	8号土坑出土遺物実測図(2)……………	11	第34图	A区階段状遺構埋出土遺物実測図……………	17
第17图	9号土坑実測図……………	13	第35图	C区包含層出土遺物実測図……………	17
第18图	10号土坑実測図……………	13			

图版目次

图版 1	大恩寺遺跡全景	大恩寺遺跡A区全景
	B区全景	C区全景
	D区全景	1号竪穴住居跡遺物出土状況
	1号竪穴住居跡	2号竪穴住居跡
图版 2	7号土坑	8号土坑
	8号土坑遺物出土状況	1号中世墓人骨及び遺物出土状況
	3号溝状遺構	階段状遺構
图版 3	大型落ち込み	1号竪穴住居跡出土遺物
	1号竪穴住居跡出土遺物	1号竪穴住居跡出土遺物
	7号土坑出土遺物	8号土坑出土遺物
	8号土坑出土遺物	8号土坑出土遺物
	8号土坑出土遺物	8号土坑出土遺物
	8号土坑出土遺物	8号土坑出土遺物
	8号土坑出土遺物	8号土坑出土遺物
图版 4	8号土坑出土遺物	8号土坑出土遺物
	8号土坑出土遺物	8号土坑出土遺物
图版 5	8号土坑出土遺物	8号土坑出土遺物
	8号土坑出土遺物	8号土坑出土遺物
	8号土坑出土遺物	8号土坑出土遺物
	8号土坑出土遺物	8号土坑出土遺物
	2号溝状遺構出土遺物	2号溝状遺構出土遺物
	1号竪立住建物跡出土遺物	1号中世墓出土遺物
	A区階段状遺構埋出土遺物	大型落ち込み出土遺物
	C区包含層出土遺物	C区包含層出土遺物
	C区包含層出土遺物	C区包含層出土遺物
	C区包含層出土遺物	C区包含層出土遺物

I. 調査に至る経過

大分県土木建築部では、平成4年4月に県道赤根富来浦線(大恩寺工区)960mについて、道路改良工事の実施を決定し、平成5年4月に土木建築部より路線内に所在する大恩寺遺跡の取り扱いについて初めての協議がもたれた。平成6年10月に試掘調査をおこない、弥生、中世、近世の遺構、遺物を確認したため、本調査の実施を決定した。調査対象面積は3,300㎡で、平成6年10月から11月と平成8年2月から5月の2回に分けて本調査を行なった。調査区内の全長は約300m、幅約10mで、宅地、水田等に用いられているため、生活道路、建物基礎等を残し遺跡の調査を行なった。

II. 地理的歴史的環境

瀬戸内海西部に位置する国東半島は、伊予灘に面して中国・四国地方に臨む海上交通の要所である。半島は中央部にある両子山、文殊山より「国東二十八谷」といわれる谷筋が放射状に伸びている。谷は河川により削り取られ河岸段丘を形成し、押し流された土砂は河成堆積地と砂浜をつくりだす。海に面した地域は砂浜のほか海成段丘が発達している。遺跡の分布をみると、この河岸段丘や河成堆積地上に遺跡が集中しており、現在でも水田や集落が散在し生活の場となっている。海成段丘上には古墳が点在しており特異な景観をつくり出している。半島東部に位置する国東町は、北方に黒曜石を産する姫島を望み、来浦谷、富来谷、田深谷と半島内でも主要な河成堆積の平野を有している。大恩寺遺跡は、町の北部を東流する富来川北岸の河口から4km程の河岸段丘上に位置している。調査区の標高は45m～49m程で、富来川から近いところ15m、遠いところで150m程しか離れていない。発掘調査中にも調査区内からは大量の砂礫を確認しており、河川の氾濫が頻繁に起こっていた事を裏付けるものである。

国東半島東部では、永く旧石器時代の遺跡は未発見であったが、近年、安岐町塩屋伊豫遺跡が確認され、国府型のナイフ形石器が出土している。縄文時代についても塩屋伊豫遺跡(早期)や国東町塩屋羽田遺跡(前期)など伊予灘を眼下に臨む丘陵上から確認された。これらからは、一遺跡の消費量をはるかにこえる姫島黒曜石が出土しており、産地と消費地を結ぶ中継ポイントと考えられている。弥生時代は安国寺遺跡のように河成堆積地上に集落が形成されていくが、武蔵町熊尾遺跡(中期～後期)の様に台地上の集落も確認されている。古墳時代に入ると、海成段丘上やそれより一段高い丘陵上に古墳の築造が始まる。4世紀代では前方後円墳である安岐町下原古墳が出現することで、畿内地方との強い結び付きが伺える。5世紀代になると国見町鬼塚古墳、杵築市御塔山古墳が築造されている。しかし、国東半島東部は前述した下原古墳と国東町番所の鼻古墳群内にも前方後円墳が確認されているだけであり、別府湾岸や海部地域とは異なった展開を示している。奈良時代では国東町桜元宮遺跡と桜八幡遺跡から古瓦が出土している。平安時代の遺跡としては、田深川、武蔵川、安岐川下流域に条甲跡が残されている。中世にいたると「国東郷」として国衙領となり、つづいて田原氏、大友氏の所領となる。平安後期に六部満山と称される天台寺院が創建され、平安末には最盛期を迎えることになるが、このころより武士層の支持する禅宗が広がりをもせることになり衰退の一途をたどる。近世にはいり葛尾、細川氏、小寺原氏、杵築藩松平氏などの所領を経て近代にいたっている。

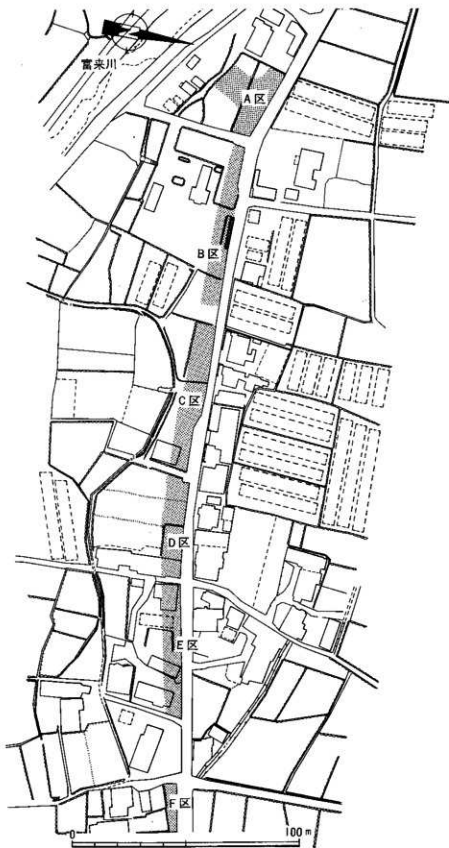
III. 調査の概要

調査区は長大であるため、便宜上A区からF区を設定した。調査は平成6年10月から11月にA区、平成8年2月から5月にB区からF区について実施した。調査はまず、表土を重機で除去後、発掘作業員の手作業により、遺構、遺物の精査をおこなった。精査の結果、当該区は大恩寺遺跡の東端から、隣接地にあたり、且つ、河岸段丘の落ちぎわで、道路、宅地、水田、畑地に用いられ削平が進んでいたため、遺跡の残存状態は悪かった。区内の上砂堆積状況は表土層一褐色粘質土一灰色砂礫層一灰色砂層(旧河床)の順である。確認された遺構は竪穴住居跡2基と土坑14基、中世基1基、階段状遺構1基、溝状遺構4条、大型落ち込み1基、中世から近代にかけての遺物包含層である。E・F区は表土直下より砂礫層が厚く堆積しており富来川の氾濫域と考えられる。このため、区内からは遺構、遺物ともに確認されなかった。

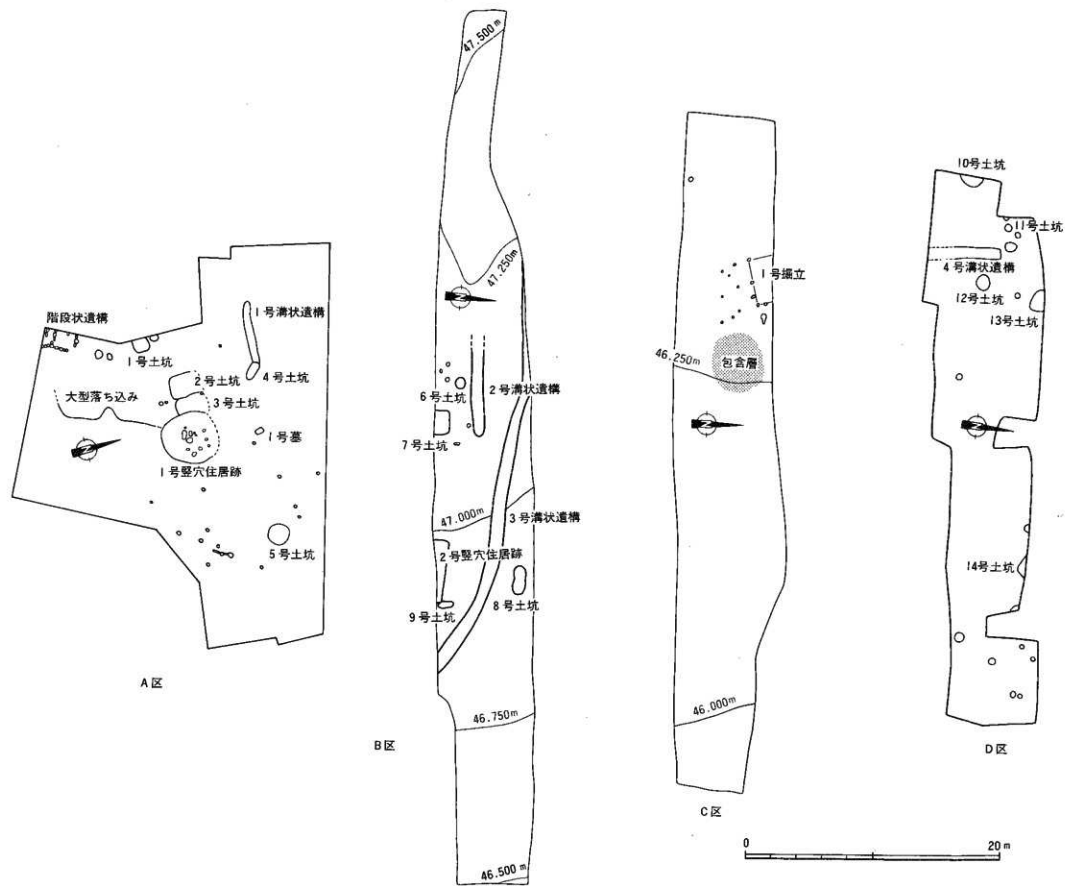


第1図 大恩寺遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院「富来浦」2万5千分の1より転載)

- | | | | | |
|-------------|------------|----------|-----------|-----------|
| 1. 大恩寺遺跡 | 2. 浜横穴墓群 | 3. 来浦古墳 | 4. 宮ノ本遺跡 | 5. 長野遺跡 |
| 6. ワラミノ遺跡 | 7. 塩屋横穴墓群 | 8. 鳴横穴墓群 | 9. 羽田遺跡 | 10. 下堀田遺跡 |
| 11. 日本遺跡 | 12. 浜崎寺遺跡 | 13. 寺山古墳 | 14. 狐塚古墳 | 15. 長浜古墳 |
| 16. 番所の鼻古墳群 | 17. 大石久保遺跡 | 18. 田深条里 | 19. 田深遺跡 | 20. 千疋遺跡 |
| 21. 古木古墳 | 22. 吉木遺跡 | 23. 前田遺跡 | 24. 安国寺遺跡 | 25. 桜本宮遺跡 |
| 26. 安用寺古墳 | 27. 立野横穴墓群 | 28. 原遺跡 | 29. 岩塚遺跡 | 30. 岩屋古墳 |
| 31. 横手遺跡 | | | | |



第2図 大恩寺通跡周辺地形図



第3図 大恩寺遺跡遺構配置図

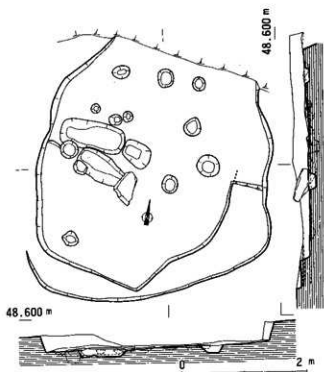
IV. 遺構と遺物

1号竪穴住居跡

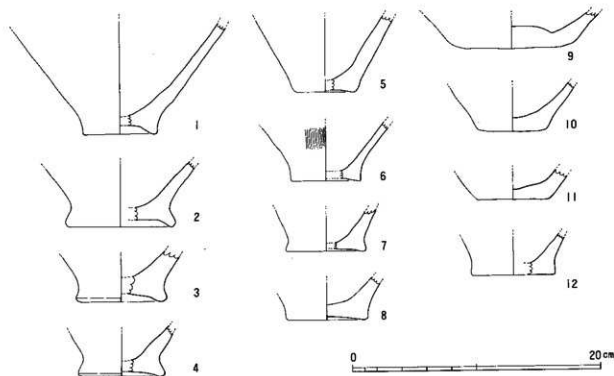
遺構はA地区の中央部に位置する。平面プランは多角形で、確認できる規模は3.95m×4.19m、最大深27cmである。住居内側には高さ約20cm、幅80cmのベット状遺構があり、西壁添いには屋内土坑を2基確認している。柱穴は13基検出したが、ともに掘り方が浅く主柱穴を断定できなかった。遺物は石皿と土器片を出土している。

1号竪穴住居跡出土遺物

竪穴内より出土した遺物はすべて底部片である。器種は1～8、12は甕であり、9～11は壺と思われる。甕の底部には三種類あり1～4の脚台風の上げ底と5～8のいわゆる上げ底、さらに12の平底である。1の色調は内外面ともに褐色で、胎土には角閃石と白色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともに僅かにナデを確認できる。底径6.0cmである。2の色調は内外面ともに褐色で、胎土には角閃石、斜長石、赤色砂粒、白色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともに僅かにナデを確認できる。底径8.6cmである。3の色調は内外面ともに褐色で、胎土には角閃石、斜長石、白色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともに僅かにナデを確認できる。底径7.2cmである。4の色調は内外面ともに褐色で、胎土には角閃石、斜長石、白色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともに僅かにナデを確認できる。底径7.0cmである。5の色調は



第4図 1号竪穴住居跡実測図

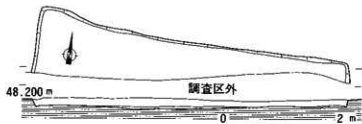


第5図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図

内外面ともに黄褐色で、胎土には角閃石、斜長石、白色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともにナデを僅かに確認できる。底径5.5cmである。6の色調は内外面ともに黄褐色で、胎土には角閃石、斜長石、白色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともにナデを施す。外面には一部ハケ目痕が確認できる。底径5.5cmである。7の色調は内外面ともに橙色で、胎土は角閃石、斜長石、白色砂粒、赤色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともに僅かにナデを確認できる。底径6.3cmである。8の色調は内外面ともに橙色で、胎土は角閃石、白色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともにナデを僅かに確認できる。底径6.2cmである。9の色調は内外面ともに灰褐色で、胎土には角閃石、斜長石、白色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともに僅かにナデを確認できる。底径8.8cmである。10の色調は内外面ともに橙色で、胎土は角閃石、斜長石、白色砂粒、赤色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともにナデを僅かに確認できる。底径5.3cmである。11の色調は内外面ともに赤褐色で、胎土には角閃石、白色砂粒、赤色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともにナデを僅かに確認できる。底径5.6cmである。12の色調は内外面ともに橙色で、胎土には角閃石、斜長石、赤色砂粒が含まれる焼成良好な土器である。調整は内外面ともにナデを僅かに確認できる。底径5.6cmである。遺物の時期は壺の底部特徴から弥生時代中期後半～末を中心とすると考えられるが、壺の底部稜線がはっきりしないものもあり、後期初頭まで含めておきたい。

2号整穴住居跡

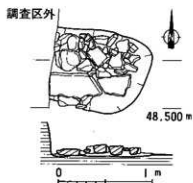
遺構はB区のほぼ中央部に位置するが、南側部分は調査区外に続くものと推定される。平面プランは方形で、確認できる規模は4.55m×1.15m以上、最大深15cmである。埋土は褐色土一層である。遺構の底部は平埧で、立ち上がりも明瞭である。時期を確認できる遺物は出土しなかった。遺構は形態から堅穴住居の可能性が高い。



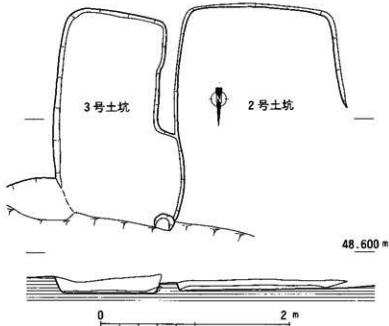
第6図 2号整穴住居跡実測図

1号土坑

遺構はA区の南西端に位置するが、西側部分は調査区外に続くものと推定される。平面プランは長楕円形で、確認される規模は長軸1.08m以上、短軸84cm、最大深6cmである。掘り方は浅いもので、立ち上がりは明瞭でない。遺構内からは角礫が敷き詰められた状態で検出されたが、他の遺物は出土しなかった。1号溝状遺構の例から溝状の遺構である可能性がある。



第7図 1号土坑実測図



第8図 23号土坑実測図

2号土坑

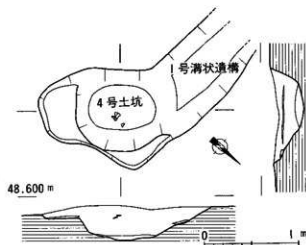
遺構はA区の中央部に位置し、3号土坑と切り合い関係にある。平面プランは隅丸長方形で、確認できる規模は長軸2.37m以上、短軸1.84m、最大深8cmである。底部は平坦で立ち上がりは明瞭である。3号土坑との切り合い関係は不明である。遺物は出土しなかった。

3号土坑

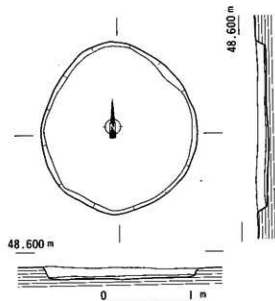
遺構はA区の中央部に位置し、東側に1号竪穴住居跡、西側は2号土坑と切り合い関係にある。平面プランは張り出しを持つ隅丸長方形で、確認できる規模は長軸2.15m以上、短軸1.37m以上、最大深20cmである。底部は平坦で立ち上がりは明瞭である。2号土坑との前後関係は不明である。遺物は出土しなかった。

4号土坑

遺構はA区のほぼ中央部に位置するが、南西側壁面を1号溝状遺構に切られ消失している。平面プランは不定形で、確認される規模は長軸1.45m以上、短軸1.04m、最大深38cmである。遺構内は二段掘りになっており、立ち上がりは明瞭である。遺物は土器片が若干出土している。



第9図 4号土坑実測図



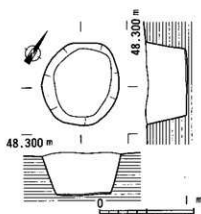
第10図 5号土坑実測図

5号土坑

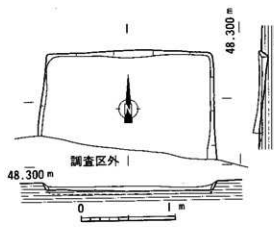
遺構はA区の北東端に位置する。平面プランはほぼ円形で、規模は長軸1.84m、短軸1.67m、最大深13cmである。底部は平坦で立ち上がりは明瞭である。遺物は出土しなかった。

6号土坑

遺構はB区の中央部に位置する。平面プランはほぼ円形で、規模は長軸87cm、短軸84cm、最大深43cmである。底部は平坦で、立ち上がりは明瞭である。埋土は砂粒を含む褐色土一層である。遺物は出土しなかった。



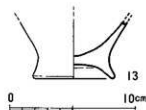
第11図 6号土坑実測図



第12図 7号土坑実測図

7号土坑

遺構はB区のはぼ中央に位置するが、南側部分は調査区外に続くものと推定される。平面プランは方形で、確認できる規模は1.82m×1.16m以上、最大深10cmである。埋土は褐色土一層である。遺構の底部は平坦で、立ち上がりは明瞭である。遺物は土器片が若干出土した。



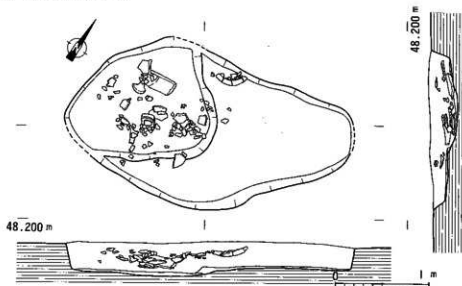
7号土坑出土遺物

13は脚台付甕の底部片である。色調は外面が赤褐色、内面は黄褐色で、胎土には角閃石と赤褐色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともにナデを確認できる。底径6.4cmである。遺物は弥生中期後半～末に比定できよう。

第13図 7号土坑出土遺物実測図

8号土坑

遺構はB区の中央に位置する。平面プランは不定形で、規模は長軸3.08m×短軸1.75m、最大深32cmである。底部は平坦で、二段になっており、立ち上がりは明瞭である。埋土は二層で、遺構底部に砂粒を含む褐色土が沈澱し、その上層に暗褐色土が堆積している。遺物は底部から15cm程浮いた

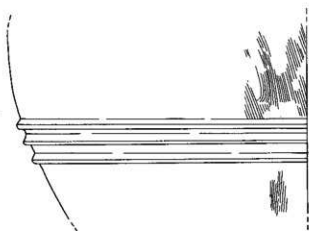
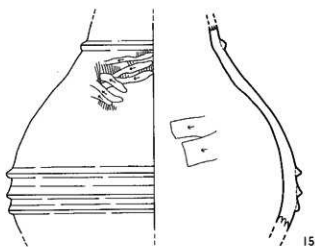
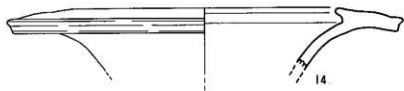


第14図 8号土坑実測図

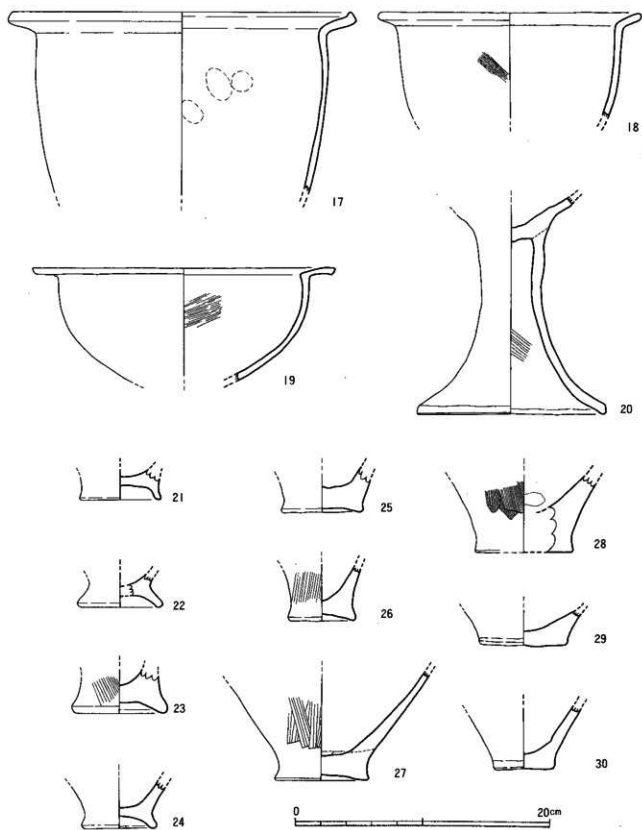
状態で高環、甕、甍片が出土している。

8号土坑出土遺物

14は鋤先状の口縁部である。色調は内外面ともに淡黄褐色で胎土には角閃石と白色砂粒を含む焼成良好な土器である。口縁部は回転ナデを施し他はナデ調整を確認できる。口径は21.3cmである。15は壺の頸部から胴部に至る部分である。頸部に1条と胴部に3条の断面三角形の貼り付け突帯を持つ。外面の色調は暗赤褐色、内面は黄褐色で胎土には角閃石と白色砂粒を含む焼成良好な土器である。外面の頸部から胴部に至る部分にはハケ目後、ご削りを施している。内面は荒く削った後、ナデを施している。胴部最大径は23.4cmである。16は壺の胴部である。胴部直下には3条の断面台形の突帯を持つ。色調は内外面ともに淡黄褐色で胎土には角閃石、雲母、赤褐色砂粒を含む焼成良好な土器である。外面には上下方向にハケ目を確認できるが内面は調整不明である。胴部最大径は47.4cmである。17は甕の口縁部から胴部に至る部分で、いわゆる跳ね上げ口縁甕である。口縁部はくの字状で口唇部を跳ね上げている。色調は内外面ともに暗茶褐色で胎土には角閃石と赤褐色砂粒を含む焼成良好な土器である。口縁部は横ナデ、外面はナデ調整を施し内面には指圧痕を残している。口径は26.6cmである。18は甕の口縁部から胴部に至る部分で口縁部はくの字状である。色調は内外面ともに淡黄褐色で胎土は角閃石、雲母と赤褐色、褐色、乳白色の砂粒を含む焼成良好な土器である。口縁部は横ナデ、外面はハケ目を斜め方向に施し内面はナデ調整である。口径は20.1cmである。19は高環の環部で口縁部はくの字状に屈曲している。色調は内外面ともに淡黄褐色で、胎土には角閃石、長石、雲母、白色砂粒を含む焼成良好な土器である。内面は斜め方向にハケ目の痕跡を僅かに残し、外面は調整不明である。口径は18.9cmである。20は高環の脚部である。色調は内外面ともに黄褐色で、胎土には角閃石、雲母と白色、赤褐色の砂粒を含む焼成良好な土器である。外面は削り後ナデ調整し、内面は削り後ハケ目調整を施す。底径15.0cmである。21～30は甕の底部片で、21～24は脚台、25～27は上げ



第15图 8号土坑出土遗物实测图(1)



第16图 8号土坑出土文物实测图(2)

底、28～30は平底である。21の色調は外面が赤褐色、内面は黄灰褐色で、胎土には角閃石と白色、赤褐色の砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともにナデを施す。底径6.5cmである。22の色調は内外面ともに赤褐色で、胎土には角閃石と白色の砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともにナデを施す。底径6.2cmである。23の色調は外面が赤褐色、内面は淡黄灰色で、胎土には角閃石と白色、赤褐色の砂粒を含む焼成良好な土器である。底径7.5cmである。24の色調は内外面ともに赤褐色で、胎土には角閃石と白色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともにナデを施す。底径6.0cmである。25の色調は内外面ともに淡黄褐色で、胎土には角閃石と赤褐色の砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともにナデを施す。底径6.4cmである。26の色調は外面が赤褐色、内面は暗赤褐色で、胎土には角閃石と白色の砂粒を含む焼成良好な土器である。底部外面と内面にはナデ調整を僅かに確認できる。外面にはナデ後ハケ目を施している。底径は7.2cmである。27の色調は黄褐色で、胎土には角閃石と赤褐色砂粒を含む焼成良好な土器である。内面はナデ調整を施しているが、底部には指匠痕を明瞭に確認できる。外面はナデ後ハケ目を確認でき、底部はナデ調整を僅かに残している。底径7.5cmである。28の色調は外面が赤褐色、内面は黒褐色で、胎土には角閃石、雲母、白色砂粒を含む焼成良好な土器である。外面調整はハケ目と横ナデを僅かに残し、内面底部には指匠痕を明瞭に確認できる。底径7.8cmである。29の色調は外面が赤褐色、内面は淡黄灰色で、胎土には角閃石を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともにナデを施す。底径6.8cmである。30の色調は黄色褐色で、胎土は角閃石と白色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともにナデを施す。底径4.8cmである。14～20は遺構床面から5cmほど浮いた状態で、21～30は遺構検出時に出土したものである。土器群の時期は弥生中期末～後期初頭に比定されよう。

9号土坑

遺構はB区の中央部、2号竈穴住居跡の東隣に位置する。平面プランは不定形で、規模は全長1.19m、最大幅51cm、最大深14cmである。底部は平坦で立ち上がりは明瞭である。埋土は褐色土一層である。遺物は出土しなかった。

10号土坑

遺構はD区の西端で確認されたが、西半分は調査区外に続くものと推定される。平面プランは円形で、確認できる規模は直径1.78m、最大深9cmである。底部は平坦で立ち上がりは明瞭である。埋土は砂粒を含む、黒褐色土一層である。遺物は出土しなかった。

11号土坑

遺構はD区の西端に位置する。平面プランは楕円形で、規模は長軸1.15m、短軸1.25m、最大深33cmである。底部は平坦で、立ち上がりは明瞭である。埋土は砂礫を多量に含む、灰色土一層である。遺物は出土しなかった。

12号土坑

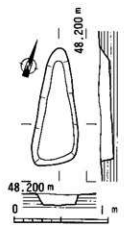
遺構はD区の西端に位置する。平面プランはほぼ円形で、規模は長軸1.13m、短軸98cm、最大深46cmである。底部は平坦で立ち上がりは明瞭である。埋土は砂礫を含む、灰色土一層である。遺物は確認されなかった。

13号土坑

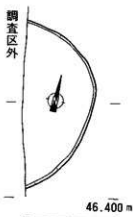
遺構はD区の西端に位置するが、北側部分は調査区外に続くものと推定される。平面プランはいびつな楕円形で、確認できる規模は1.83m×1.14m以上、最大深32cmである。底部は平坦で立ち上がりは明瞭である。埋土は砂礫を含む、灰色土一層である。遺物は出土しなかった。

14号土坑

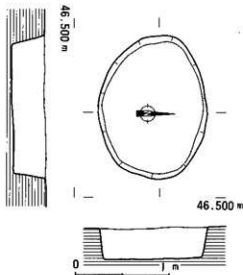
遺構はD区の中央に位置するが、北側部分は調査区外に続くものと推定される。平面プランは方形で、規模は1.75m×1.32m、最大深10cmである。埋土は茶褐色一層である。遺構の底部は平坦で、立ち上がりは明瞭である。遺物は出土しなかった。



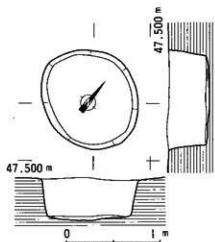
第17図 9号土坑実測図



第18図 10号土坑実測



第19図 11号土坑実測図



第20図 12号土坑実測図



第21図 13号土坑実測図



第22図 14号土坑実測図

1号溝状遺構

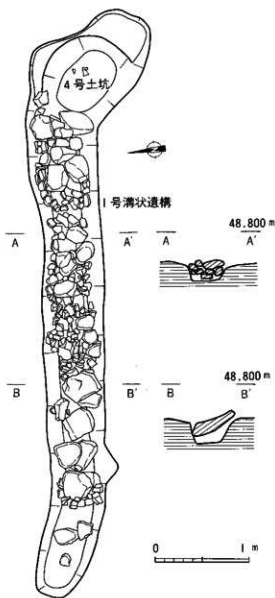
遺構はA区のほぼ中央部に位置するが、4号土坑と切り合い関係にある。確認できる規模は全長4.95m、最大幅76cm、最大深28cmである。底部は平坦で、立ち上がりは明瞭である。遺構内には底部から検出面まで角礫が詰め込まれているが、他の遺物は出土しなかった。

2号溝状遺構

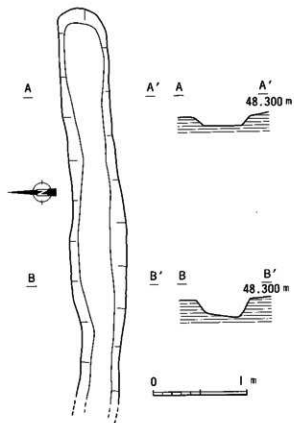
遺構はB区の中央部をほぼ東西に走るが、東側は削平を受けており消失している。確認できる規模は全長4.52m、最大幅62cm、最大深20cmである。溝の断面は逆台形で、立ち上がりは明瞭である。埋土は褐色土一層である。遺物は一部弥生時代中期の土器片が出土したが、16世紀後半の鉢が検出されており、時期は室町時代後半に比定される。

2号溝状遺構出土遺物

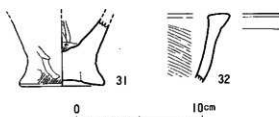
31は厚い上げ底の甕底部片である。色調は内外面ともに淡黄褐色で、胎土には角閃石、長石、白色砂粒が含まれる。焼成良好な土器である。内外面ともにヘラ磨きを施し、底部には指爪痕とハケ目が確認できる。底径6.5cmである。時期は弥生中期前半頃で、下城か城ノ越式甕の底部であろう。32は鉢(浅鉢)の口縁部である。口縁部には断面三角形の突帯を施してある。色調は内外面ともに淡赤褐色で、胎土には石英と白色の砂粒を含む焼成良好



第23図 1号溝状遺構実測図



第24図 2号溝状遺構実測図



第25図 2号溝状遺構出土土物実測図

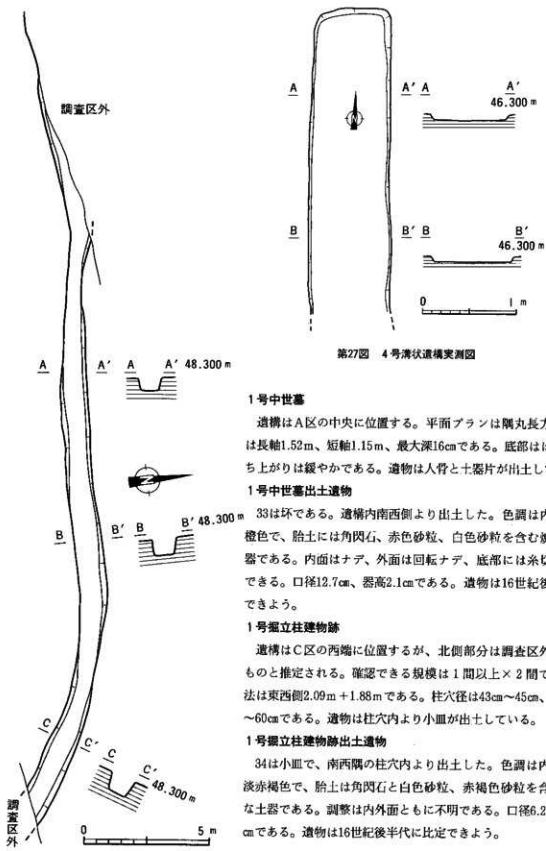
な土器である。内外面ともにナデと斜め方向のハケ目が確認される。安岐城跡本丸整地層出土のものに類似し、16世紀後半と考えられる。

3号溝状遺構

遺構はB区の中央部を北北西から南南東に走るが、両端とも調査区外に続いているものと推定される。確認できる規模は全長58.55m、最大幅2.02m、最大深1.45mである。溝の断面は逆台形で、南南西に進むにつれ深さを増す。底部は平坦で、立ち上がりは明瞭である。埋土は礫を主とする灰色土一層である。時期を特定できる遺物は確認できなかった。

4号溝状遺構

遺構はD区の西側に位置するが、南側部分は調査区外に続くものと推定される。確認できる規模は全長3.38m、最大幅86cm、最大深7cmである。溝は削平が著しいが、底部は平坦で立ち上がりは明瞭である。埋土は砂を含む灰色土一層である。遺物は出土しなかった。



第27図 4号溝状遺構実測図

1号中世墓

遺構はA区の中央に位置する。平面プランは隅丸長方形で、規模は長軸1.52m、短軸1.15m、最大深16cmである。底部はほぼ平坦で立ち上がりは緩やかである。遺物は人骨と土器片が出土している。

1号中世墓出土遺物

33は坏である。遺構内南西側より出土した。色調は内外面ともに橙色で、胎土には角閃石、赤色砂粒、白色砂粒を含む焼成良好な土器である。内面はナア、外面は回転ナア、底部には糸切り痕を確認できる。口径12.7cm、器高2.1cmである。遺物は16世紀後半代に比定できよう。

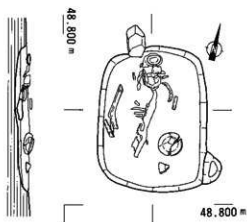
1号獨立柱建物跡

遺構はC区の西端に位置するが、北側部分は調査区外に展開するものと推定される。確認できる規模は1間以上×2間で、柱穴間寸法は東西側2.09m+1.88mである。柱穴径は43cm~45cm、最大深55cm~60cmである。遺物は柱穴内より小皿が出土している。

1号獨立柱建物跡出土遺物

34は小皿で、南西隅の柱穴内より出土した。色調は内外面ともに淡赤褐色で、胎土は角閃石と白色砂粒、赤褐色砂粒を含む焼成不良な土器である。調整は内外面ともに不明である。口径6.2cm、器高1.6cmである。遺物は16世紀後半代に比定できよう。

第26図 3号溝状遺構実測図



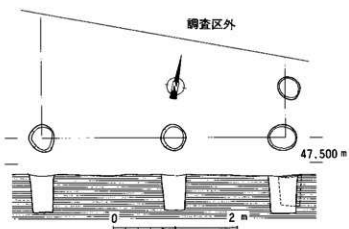
第28図 1号中世墓実測図



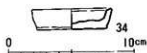
33



第29図 1号中世墓出土遺物実測図



第30図 1号獨立柱建物跡実測図



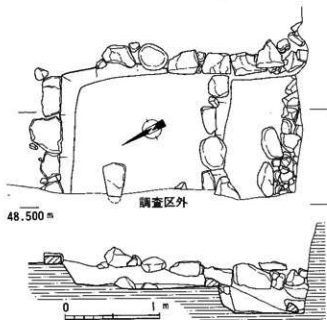
34



第31図 1号獨立柱建物跡出土遺物実測図

階段状遺構

遺構はA区の南西端に位置するが、西側部分は調査区外に続くものと推定される。確認できる規模は2.75 m × 1.61 mで、段差は30 cm程である。遺跡は近世のものと考えられる。遺物は遺構埋土内（流れ込み）より弥生時代の上器片を僅かに出土している。



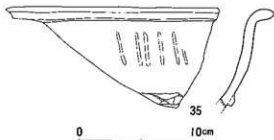
第32図 階段状遺構実測図

大型落ち込み出土遺物

遺構は1号竪穴居跡南側に広がる、南北長9m、東西長2m以上、最大深20cmの落ち込みである。35は遺構のほぼ中央部から10cmほど浮いた状態で出土したもので、宇佐高村産のこね鉢と思われる。色調は内外面とも淡褐色である。胎土には角閃石、石英、赤色砂粒を含む焼成良好な土器片である。内面は横ナデ、外面はナデ及びヘラ削りの後、工具痕を残している。高村産であれば17世紀後半から18世紀前半に比定できよう。

階段状遺構埋土出土遺物

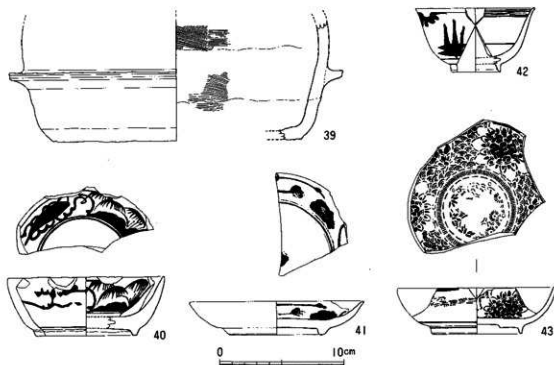
36～38はA区階段状遺構埋土内より出土した。遺物は底片で平底である。36の色調は内外断面とも黄褐色である。胎土は角閃石、白色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともに僅かにナデを確認できる。底径6.6cmである。37の色調は内外断面ともに淡褐色である。胎土には角閃石、斜長石、石英を含む焼成良好な土器である。調整は内外面ともに僅かにナデを残す。底径5.2cmである。38の色調は内外断面ともに淡黄褐色である。胎土には角閃石、石英、白色砂粒、赤色砂粒を含む焼成良好な土器である。調整は内外ともにナデを僅かに確認できる。底径7.8cmである。遺物は弥生時代中期後半に比定できよう。



第33図 大型落ち込み出土遺物実測図



第34図 A区階段状遺構埋土出土遺物実測図



第35図 C区包含層出土遺物実測図

C区包含層出土遺物

包含層は1号掘立柱建物跡東側に広がっている。39は瓦質茶釜の胴部から底部にいたる部分である。色調は内外面ともに淡黄褐色で大部分に煤が沈着している。胎土には角閃石、白色砂粒、赤色砂粒を含む。調整は外面がナデ、内面はナデのち横方向にハケ目部分を部分的に確認できる。底径20.4cmである。遺物は16世紀前半代に比定できよう。40、41は肥前系磁器染付皿で40にはコンニャク印判が認められる。40の口径は12.5cm、41の口径は13.6cmである。遺物は18世紀後半の製品である。42は肥前磁器染付端反碗で1820～1860年代のものである。口径9.5cm、器高5.1cm、底径4.1cmである。43は肥前系の型紙摺り皿である。口径は12.6cmである。遺物は1870～1880年の製品である。

V. ま と め

調査区は県道赤根富来浦線の富来浦から半島中心部に向かい約5kmほどのところに位置する。この位置にくと500mほどあった谷幅が200mほどに急速に狭まり、中央には富来川が東流し狭小な椋相をさらに強めている。この富来川の形成する谷筋にはワラミノ遺跡（縄文、中世）、下掘田遺跡（縄文、弥生）、貝本遺跡（弥生）、浜崎寺山遺跡（古代、中世）、寺山古墳（古墳）、狐塚古墳（古墳）など縄文から中世にいたる遺跡が分布している。大恩寺遺跡はワラミノ遺跡と下掘田遺跡のほぼ中間に位置するもので、国東半島内陸部における諸相を窺取できるものと考えられる。

今回の調査で確認された遺構は、堅穴住居跡2基、土坑14基、溝状遺構4条、中世墓1基、掘立柱建物跡1基、階段状遺構1基、大型落ち込み1基などとともに、遺物包含層が確認された。ともに表土層直下から検出されており、遺跡の残存状態はあまり良くなかった。

弥生時代の遺物を出土した遺構は1号堅穴住居跡、7号土坑、8号土坑で、ともに調査区の内なかでも最も標高の高いA、B区より確認された。しかし、A、B区は富来川から15～50m程しか離れておらず、全体の地形を見るかぎり遺跡の主要部は、さらに標高の高い河岸段丘上に展開する可能性が高い。時期的には1号堅穴住居跡が中期後半から後期初頭、7号土坑が中期後半から末、8号土坑が中期末から後期初頭にそれぞれ位置づけられたが近世遺構の埋土内に若干中期前半の遺物も検出されており、この階段には確実に弥生集落の営みが開始されたと考えられる。また、中期後半～後期初頭にかけての集落跡の検出は、国東半島地区では希薄な時期だけに、その集落の一端を確認できたことは、重要な事柄であった。

中世の遺物が出土したのは、1号中世墓、1号掘立柱建物跡、2号溝状遺構である。中世墓はA区、建物跡は砂礫層（富来川の氾濫域で、A、B区より一段下の河岸段丘）の広がるC区に位置する。出土遺物の時期はともに室町時代後半で、出土状況から遺構に伴うものと考えられる。調査区に隣接する大恩寺の創建が、平安後期～末期の六郷満山と称される天台寺院にまで遡れ、かつ、14世紀末（応永元年：1394年）に武士勢力の頭の中て禪宗に転宗したことを考えると、その後も、調査区付近では大恩寺、あるいはその他の活動があったことが推測される。

近世、近代の遺物が出土したのはA区の大形落ち込みとC区の包含層である。落ち込みから出土したこね鉢は17世紀後半から18世紀前半の製品で、遺構に伴う遺物である。さらに、遺構西側に位置する階段状遺構も落ち込みの上砂堆積状況から、同期のものである可能性が高く、大恩寺に関連する遺構と考えられ、寺域を推定する包含層から出土した遺物は16世紀から明治にわたるもので、江戸期を通じ幕末までの間に大恩寺村が形成されたことを考えると、遺物的な裏付けがとれることになる。

その他の遺構については、時期を特定できる遺物が出土しておらず断定的なことはいえないが、ともに上記の遺構の時期に関係するものと考えられる。

写 真 图 版



大恩寺遺跡全景



大恩寺遺跡A区全景



B区全景



C区全景



D区全景



1号整穴住居跡遺物出土状況



1号整穴住居跡



2号整穴住居跡



7号土坑



8号土坑



8号土坑遺物出土状況



1号中世墓人骨及び遺物出土状況



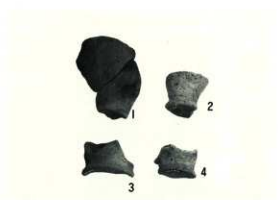
3号溝状遺構



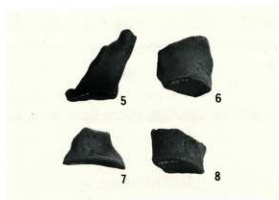
階段状遺構



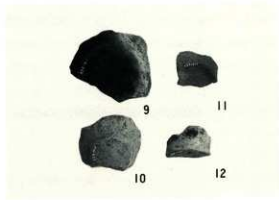
大型落ち込み



1号竪穴住居跡出土遺物



1号整穴住居跡出土遺物



1号整穴住居跡出土遺物



7号土坑出土遺物



8号土坑出土遺物



8号土坑出土遺物



8号土坑出土遺物



8号土坑出土遺物



8号土坑出土遺物



19

8号土坑出土遗物



20

8号土坑出土遗物



21



23



22



24

8号土坑出土遗物



25



26



27

8号土坑出土遗物



28



30



29

8号土坑出土遗物



31

2号溝状遺構出土遺物



32

2号溝状遺構出土遺物



33

1号中世墓出土遺物



34

1号孤立柱建物跡出土遺物



35

大型落ち込み出土遺物



36



38



37

A区階段状遺構埋土出土遺物



39

C区包含層出土遺物



40



40

C区包含層出土遺物



41



41

C区包含層出土遺物



42



42

C区包含層出土遺物



43



43

C区包含層出土遺物

報 告 書 抄 録

フリガナ	ダイオンジイセキ
書名	大恩寺遺跡
副書名	県道赤根富米浦線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	—
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第97集
編著者	染矢和徳
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870 大分県大分市府内町3-10-1
発行年月日	1997年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大恩寺遺跡	大分県 東国東 郡大字大恩寺	443239	015	33° 37' 00"	131° 40' 50"	19941003 19960519	3,300㎡	県道赤根 富米浦線 道路改良 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大恩寺遺跡		弥生時代 中世、近世	竪穴住居跡、溝状遺構 階段状遺構、土坑	土器	

大 恩 寺 遺 跡

県道赤根富来浦線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
大分県文化財調査報告書第97集

1997年3月31日

発 行 大分県教育委員会
印 刷 日新印刷株式会社